愛知県尾張地方郡市町村史に見られる方言記述・研究

A short survey on studies and descriptions of Owari-Dialect

山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

1．はじめに

市町村史は，日本各地に同様に存在するが，特に決まった項目から構成されているわけでもなく，その記述内容は多様である。しかし，特定の項目の記述内容・方法については，地域ごとの特性や参照関係が見られ，その時代・その土地での記述・研究の潮流を概観できることもある。

本考察は，特に愛知県尾張地方で編纂された郡市町村史における方言の記述に関して，どのような時期に，どのような方言の項目・内容について記述がなされ，それらの記述がどのような相互の関係をもってきたかを調べ報告することで，愛知県尾張地方における方言記述・研究がどのようになされてきたのかを垣間見ていこうというものである。

愛知県尾張地方は，長く，徳川御三家の一，尾張藩の中心地として栄えてきた名古屋を中心とし，民俗文化に対して先進的な記述・研究が盛んにおこなわれてきた土地である。江戸時代には，すでに山本格安による『尾張方言』(1748) をはじめ，洒落本や滑稽本等にもその時代の地域言語がふんだんに記述され（彦坂1997ほか），昭和初期にも中島郡起町（現　一宮市）にて加賀治雄（1893-1958）の手によって発刊された『土の香』にも方言が頻繁に取り上げられるなど，方言記述に関する伝統も長く，また豊富に紡がれてきた。

しかしながら，岐阜県の地方史と比較しながら尾張地方を概観すると，方言に関する記述において特徴的な違いがあることに気付く。また，この理由は何なのかも気に掛かるところである。

すでに，岐阜県内の郡市町村史に見られる方言記述については，山田 (2010) として報告をおこなった。方言的特徴からしても特に結びつきの強い両県である。岐阜県内の方言記述・研究の歴史と対比しながら見ていくことも益あることと判断し，本考察では，同時期の両県の方言記述を比較しながら考察を進めていくこととする。ただ，ある時代の研究を概観する研究分野は，もとより筆者の専門領域ではなく，わかったことを記しておくに留まることは，あらかじめ断っておきたい。

なお，今回は，紙幅の都合から愛知県西部の尾張地方という，限定された地域について，しかも，明治から昭和の戦前期を中心に見ていく点を断っておく。三河地方については別稿にて考察する。また，表記はなるべく原著に合わせるが，一致する字体がないものもあり完全ではないこともご了解いただきたい。

2．明治・大正期の愛知県尾張地方における方言研究・記述

岐阜県では，明治33年設立の国語調査会による各地方言調査要請を受け，その結果を明治時代に相次いで刊行している。明治35年 (1902) には，大野郡教育會編『明治三十五年二月　大野郡方訛言集』，養老郡教育會編『養老方言集』が刊行され，翌36年 (1903) には山川孝・度會吉郎『東濃方言集』，荒原松之助『飛驒國吉城郡方訛言集』，松平静『岐阜県方言』が相次いで刊行されるなど，国語調査会の第１次調査の時期に，岐阜県方言研究は確実に萌芽期を迎えている（山田2010）。

一方，愛知県尾張地方では[1]，現段階で確認が取れている文献に限って言えば，大正４年（1915）になってはじめて方言の記述が現れる。これは，上述した岐阜県内での動きよりもかなり遅い[2]。

しかも，『名古屋市史　風俗編』(1915) にこそ248語の語彙と25項目の文法的語尾が収録されているが，数としては，前述した岐阜県の『大野郡方訛言集』(1902) の660語に及ばない。また，同年の瀬戸町編『瀬戸町誌』(1915) には，８行に数項目の記述が，また，愛知県丹羽郡教育會編『愛知県丹羽郡誌』(1917) には，「著しきものを擧ぐ」として意味別に72項目が挙がるのみであり記述量も十分ではない。

では，この時期の愛知県尾張地方における方言研究・記述は，どのようにおこなわれていたのであろうか。その点を，郡史類ならびに市町村史とその他の記述とに分けて考察していく。

２.１　郡史類に見られる方言記述

明治から大正（一部昭和）にかけて刊行された郡史類を，三河地方も含めて比較してみる。

県/地域		郡　史　類	編著者（機関)/発行者	発行年	方言記述[3]
岐阜県	飛騨	『岐阜縣飛驒國大野郡史』	田中貢太郎/同	大正14年（1925）	なし
		『益田郡誌』	**益田郡役所/同**	**大正５年（1916）**	**282項目**
	美濃	『恵那郡史』	恵那郡教育会/同	大正15年（1926）	なし
		『郡上郡史』	郡上郡地方改良協会/同	大正15年（1926）	なし
		『美濃国加茂郡誌』	郡役所/同	大正10年（1921）	なし
		『山縣郡志』	**福井清通/山県郡教育会**	**大正７年（1918）**	**387項目**
		『本巣郡志』	**本巣郡教育会/同**	**昭和12年（1937）**	**638項目**
		『美濃国稲葉郡志』	稲葉郡教育会/同	大正４年（1915）	なし
		『揖斐郡志』	揖斐郡教育会/同	大正13年（1924）	なし
		『不破郡史』	不破郡教育会/同	昭和２年（1927）	なし
		『養老郡志』	岐阜県地方改良協会養老支会/同	大正14年（1925）	なし
愛知県	尾張	**『丹羽郡誌』**	**愛知県丹羽郡教育会/同**	**大正６年（1917）**	**72項目**
		『東春日井郡誌』	**東春日井郡役所/同**	**大正12年（1923）**	**693項目**
		『愛知県西春日井郡誌』	日比野寛（校閲)/愛知県西春日井郡教育会	明治43年（1910）	なし
		『西春日井郡誌』	**西春日井郡/同**	**大正12年（1923）**	**536項目**
		『愛知県海東郡志』	海東郡協賛会/文昌堂	明治26年（1893）	なし
		『愛知県愛知郡志』	愛知郡教育会/文昌堂	明治32年（1899）	なし
		『尾張國愛知郡志』	**愛知郡役所/同**	**大正12年（1923）**	**866項目**
		『尾張国知多郡誌』	田中重策/同盟書林	明治26年（1893）	なし
		『知多郡史』	知多郡役所/同	大正12年（1923）	なし

[1] 三河地方については，別稿にて報告する予定であるが，明治42年（1909）に，碧海郡の『新川町誌』に方言記述が見られる。また，大正５年（1916）刊の『碧海郡誌』は，質量ともにこの時代の最高水準のものである。

[2] もちろん，江戸時代の先進的な報告があることは前述の通りである。

[3] 「語」ではなく「項目」としてあるのは，ひとつの項目に複数の俚言形が挙がる場合もあり，必ずしも語数ではないためである。

	三河	『参河國西加茂郡誌』	田中正幅/文會堂	明治25年（1892）	なし
		『西加茂郡誌』	**西加茂郡教育會/同**	**大正15年（1926）**	**102項目**
		『愛知県東加茂郡誌』	東加茂郡/同	大正10年（1921）	なし
		『碧海郡誌』	**碧海郡教育会/同**	**大正５年（1916）**	**1006項目**
		『愛知県幡豆郡誌』	田部井勝蔵/文友社	明治39年（1906）	なし
		『愛知県幡豆郡誌』	幡豆郡役所/同	大正12年（1923）	なし
		『三河國額田郡誌』	**額田郡役所/同**	**大正13年（1924）**	**403項目**
		『三河國寶飯郡誌』	早川直八郎/同	明治24年（1891）	なし[4]
		『南設楽郡誌』	**南設楽郡教育会/同**	**大正15年（1926）**	**127項目**
		『八名郡誌』	八名郡役所/同	大正15年（1926）	数行あり
		『渥美郡史』	渥美郡役所/同	大正12年（1923）	なし

岐阜県に関しては，現在の飛騨市が含まれる旧吉城郡，瑞浪市・土岐市・多治見市が所属していた旧土岐郡，現海津市全域の旧海津郡，ならびに，可児郡，羽島郡，安八郡では，戦前，郡史類が刊行されていない。

一方，愛知県に関しては，一宮市と江南市にまたがる旧葉栗郡，一宮市と稲沢市にまたがる旧中島郡，および北設楽郡では郡史類が刊行されていない反面，旧愛知郡，旧西加茂郡，旧幡豆郡，旧宝飯郡では，個人名編著による「郡誌」（あるいは「郡地誌」「郡地理誌」＝今回除外）が明治20年代から30年代にかけて編纂されており，その後，郡役所等で新たに郡史類が編まれている。いずれも，明治期の「郡誌」は，「その対象とするところは一般世人に非ずして児童であった」(近藤1960：解題)。

さて，上記，郡史類における方言記述の比較から，『碧海郡誌』(1916) が突出してはいるが，愛知県において郡史編纂が盛んにおこなわれたのは，大正10年代であり，その時代の郡史類には多く，方言の記述が見られることがわかる。

大正10年代に多く編纂されたのは，郡制廃止が間近に迫ったためである。大正最後の年に刊行された『西加茂郡誌』(1926) にも，「大正十二年郡制の廃止あり，今又この六月限り郡役所も廃さる」として，その時代に郡役所最後の役割として郡史類を刊行したことが察せられる記述が見られる。また，『三河國額田郡誌』(1924) の「序」には，「…不備の點多しと強，郡制の廃止に會し廃刊急に迫りたれば其修正は後日に譲ることゝしたり，茲に本書の稿本を印刷に附する…」とあり，当時ののっぴきならない情勢を伝えている。

しかし，愛知県内各郡においては，むしろ，この時期にこそ多くの郡史類が編まれ，その中に多くの方言記述がなされた点は特筆に値する。その点について，同時期の郡史以外の方言研究と絡めながら次節で見ていく。

2.2　明治期の口語法調査からの影響

近代日本の方言研究史については，昭和初期の雑誌『方言』をはじめ，東條操 (1938, 1958) などの存在から知ることができるが，同時代の方言研究を地方の視点から語っている資料は，竹田 (2008) などがあるものの，未だ地域的にも限定されている。

---

[4]『三河國寶飯郡誌』凡例には，「最尾集記載ノ事項ハ概ネ左ノ如シ」として「方言」が挙がっているが，近藤恒次(1980)『新訂三河國寶飯郡誌』には，この項目が削除され，また方言の記述も見られない。

方言研究における中央と地方との相互作用に関しては，上述の通り，明治の国語調査会による二度の調査が全国に依頼がなされ，明治36年（1903）と明治41年（1908）におこなわれている。本節では，この国家的事業が愛知県の方言研究にどのような影響を及ぼしたのかについて考えていく。

さて，岐阜県では，『大野郡口語法並音韻調査』(1916) という，当該調査の成果であることが明確である書物が残っている。これは，大正12年の関東大震災で焼失した，第２次調査の報告書として全国的にも数少ない現存報告書である（竹田2008)。一方，愛知県では，現存する資料として名古屋市教育会編（1903)『方言調査報告書』，および，名古屋市教育会編（1909)『名古屋ことば』が見られる。これらは第１次調査の報告書に語彙集を加えたもの，ならびにその方言索引である。

第１次調査の結果は，『音韻分布図』(1905)，『音韻調査報告書』(1905)，『口語法調査報告書』(1906) として刊行されているが，『口語法調査報告書』(1906) を例にとっても愛知県は，精力的に方言調査に取り組み，その結果を報告している。たとえば，第一条のハ行四段活用終止形のウ音便について，岐阜県など多くの県が１～数行の簡単な全県的報告をおこなっているのに対し，愛知県は，各郡，さらには，その部分（たとえば，碧海郡であれば，東南部，東北部，西南部，西北部など４地域に分ける）ごとに，たとえ，それがほぼ同じ内容であっても，報告されたとおり記されている。

しかし，この調査が各郡に対し与えた影響の点で，岐阜県と愛知県で異なりが見られる。岐阜県では，第1次調査の前後に複数の郡単位報告が見られるが，愛知県では，名古屋市を除きこれがやや遅れる。しかし，その調査依頼が郡史編纂に影響を与えたことは，はっきり見て取れる。たとえば，口語法調査では，いわゆる文法事項としての，意志，否定，命令，条件，指定，過去，敬語，使役等の調査が依頼されているが，これらの語形は，『愛知郡志』(1923)，『碧海郡誌』(1926)，『額田郡誌』(1924) に報告されている。『愛知郡志』では，名詞から順に俚言・訛言を列挙した後，「第七節　接続詞」，「第八節　助辭」，「第九節　動詞，形容詞の活用形」，「第十節　助動詞の活用形」，「第十一節　時，法等の言ひあらはし方」として，「口語法調査」の意図が引き継がれた記述がなされている。『碧海郡誌』(1916) もこれに似る。さらに，『額田郡誌』も，「六，助辞之部」，「七，接續詞之部」，「一一，助動詞之部」と，配列は異なるが，特に「助動詞」として挙がる語形は，可能，希望，推量，決意，打消，終了，希望，繼續，命令と，あまり共通語との違いのない部分をそぎ落とした記述となっており，同調査の影響が感じられるものとなっている。

一方で，『丹羽郡誌』(1917)，『東春日井郡誌』(1923)，『西春日井郡誌』(1923)，『西加茂郡誌』(1926)，『南設楽郡誌』(1926) のように，方言の記述はあっても，直接的な関連性を思わせる記述が見られず，必ずしも当該調査がきっかけになって成立したわけではないことが伺われる郡史類もある。

その理由は，よくわからない。ただ，地域の側からすれば，音訛を含む語彙こそがもっとも方言らしさを感じさせるものであり，文法表現は難解さもあってか，記述の対象となることが限定的であったのではないか。国からの要請を，地方なりのさまざまな実情というフィルターを通し受け止め，そこから独自のものを生み出していった可能性は高い。この時期の，特に地方の記述者の実情がどうであったかが，より明らかになっていくことが期待される。

２.３　未刊行の方言資料

市町村史をはじめ，発刊されたものが存在しないからと言って，その地域に方言に対する関心がなかったと言うことはできない。愛知県尾張地方においても，刊行には至らなかったが往時の方言に対する意識を知る上で欠かすことのできない草稿数点が見られる。

まず，愛知縣西春日井郡山田尋常高等小學校編『明治三十八年八月調　方言訛言矯正表』がある。時期からして，国語調査会による第1次の各地方言語調査要請を受けて収集されたものと考えられ，内容としても海津郡役所編『方言調査書類』(1915) における各小学校区の記述に似る。

タイトルどおり，語彙を正誤対照して挙げたもので，品詞別に，名詞（163項目），代名詞[5]（24項目），副詞（25項目），接続詞・接尾語（12項目），動詞・形容詞・助動詞（143項目），敬語（36項目）が挙がる。名詞の最初に，「着物／きりもの，石／いしな，蓆／みしろ」と並ぶところなどは，「方言訛言」を収集したものとの印象が強いが，実際には，「食べられましたか／くったか」，「どうなさいました／どうした，どうしたんだ」など，野卑な言葉を戒める内容となっている箇所もある。学校教員の手を経ることにより，俚言調査に「標準語教育」という意図が盛り込まれているのである。また，中に，現在でも「敬語の誤用」として取りざたされることの多い「コーヒーになります」のような表現が，「美術家…となります／…であります」と挙がっている点などは，注目に値する。

内容はともあれ，明治期における国語調査会による方言調査は，愛知県でもおこなわれていながら，管見の限り，この一点のみ現存する点は考えなければならない点である。しかも，実際，「明治三十八年八月調」とあるにもかかわらず，原稿用紙に「名古屋市立山田小学校」[6]とある点にも留意が必要である。この原稿用紙が使われる可能性があったのは，同校区が西春日井郡から名古屋市に編入された大正10年以降であるため，この『明治三十八年八月調　方言訛言矯正表』は，調査こそ明治時代におこなわれたが，実際にまとめられたのは大正末期以降である。となれば，やはり，きっかけこそ国語調査会の方言調査であったが，何らかの方言への関心が大正末期に興りまとめておく必要に改めて迫られたと考えなければならない。あるいは，さまざまな調査を依頼され報告を上げながらもなかなか刊行されず，ついには震災により灰燼に帰した調査録を，何らかの形で残しておこうと考えたのかもしれない。前書きも付記も何もない，山田尋常小學校編『明治三十八年八月調　方言訛言矯正表』編纂の理由は，さらに調べていく必要がある。

もう一点，幻の『海部郡誌』についても見ておきたい。

大正期，愛知県海部郡では，『海部郡誌』が編まれようとしたが，大正期の郡制廃止に伴いこの計画は途中で頓挫することとなった。現在，この『海部郡誌』は，草稿の第六巻（25分冊）のみが津島市立図書館に残っているが，他の巻は現存が確認できていない。一方，1938年の『津島町史』には，方言の記述末尾に「海部郡誌草稿」の文字が見られ，確実にこの草稿が存在したことが記されている。

実は，この草稿ではないかと考えられている，「津島町史編纂用箋」と入った和紙原稿を綴じたものが津島市立図書館に伝わっている[7]。ただし，直接に方言記述に添えられた年号ではないが他所に昭和７年の日付が見られ郡制廃止からやや時間が経っていることと，『津島町史』の方言記述とは提示順も内容も異なることから，これが本当に『津島町史』に引用された『海部郡誌』の原稿であるとは断定しがたいところもありつつも，何らかの参照関係はあったものと推察される。

ただ，この大正期に，ある意味で県と市町村との間で存在意義を失いかけていた郡役所が，その存在意義の確認のためもあって，地域史の編纂に尽力していたことは大いに想像しうる。一方で，それでも郡史類の中にどのような項目を盛り込むかは，各郡に任されていたことである。愛知県各地で，時期的にこそ岐阜県に遅れはしても，より手厚い記述が「満を持して」なされたこと。さらに，公刊に至らなかった一定数の調査・草稿類が愛知県内に存在したことは，大正末期という時代に，何らかの方言研究機運が高まったことを示唆する。この理由が何なのかをもう少し調べてみないといけない。

---

[5] 実際には，代名詞だけでなく呼び掛けのことば「やい」なども含む。

[6] かつて西春日井郡には二つの山田村があり，いずれも現在は名古屋市となっている。ひとつは，北区になっている旧六郷村地内であり，もうひとつは，現在名古屋市西区になっている旧山田村地区である。ただし，後者の山田村は明治38年には存在していないため，前者と推定される。

[7] この草稿の存在については，津島市立図書館副館長の園田俊介氏からご教授賜った。ただし，奥付もなく筆者等の詳細はわかっていない。

２.４　市町村史類に見られる方言記述

明治から大正にかけて，市町村史はどう方言を記述してきたであろうか。まだ，この時期，愛知県内の市町村では，方言に関する記述は多くおこなわれなかった。

翌大正７年（1918）には，加藤善右衛門による『猪高村誌』[8]（愛知郡，現 名古屋市名東区）に，「天文地理ニ關スルモノ」，「身体人倫ニ關スルモノ」，「物品名稱ニ關スルモノ」，「感情動作形容ニ關スルモノ」，「其他」，「訛言」，「發音」，「語法」，「語尾ニ關シテ誤ルモノ」として，139語と10表現が見られる。名古屋方言に特徴的な連母音「アイ」の融合なども語彙とは別に記述され，文法項目が記述されるなど，分析力のある記述が見られるが，まだ量的に貧弱である。

もう２町，古知野町と小牧町でも，大正晩年に町史が編纂され，方言の記述が見られる。『古知野町誌』では，品詞別（名詞のみさらに意味別）に181項目が記述され，『小牧町史』(1926)（現 小牧市）は，いろは順に204項目が列挙されている。

なお，同時代に刊行された『門前町誌』(1901年，現 名古屋市中区)，『末広町話』(1909年，同)，『愛知県西春日井郡誌』(1910)，『常磐村誌』(1911，現 名古屋市中区)，『富田村誌』(1916，現 名古屋市中川区)，『河和町史』(1916，現 知多郡美浜町)，『草井村史』(1916年，葉栗郡，現 江南市)，『豊明村史』(1917，愛知郡，現，豊明市)，『永和村誌』(1918，現 愛西市)，『千種町誌』(1921，現 名古屋市千種区)，『佐屋村誌』(1922，現 愛西市)，『一宮市史』(1924)，『半田町史』(1926) には方言の記述が見られない。国から調査を投げかけられた郡役所と異なり，町村単位で方言を記述することは，よほどの関心でもないかぎり，まだ時期尚早というところであろう。

岐阜県との比較においては，やはり愛知県内のほうが，方言記述の動きがやや遅い。岐阜県内では，『加茂郡黒川村誌』(1912=明治45年) をはじめとして，『東白川村誌』(1914)，『大正四年　吉城郡河合村誌』(1915)，『丹生川村誌』(1915)，『袖川村誌』(1916)，『西白川村誌』(1924)，『洞戸村誌』(1925=大正14年) と，方言の記述がなされてきている。また，記述された形式数も岐阜県は豊富である。

ただし，この当時の方言記述は，方言を「矯正すべきことば」，あくまで「正語」を指導するためのものとして捉えており，今のような懐古的に収集されたものではないことに注意しなければならない。上述の通り，地方における，特に方言の記述・研究は，教育に対する「熱意」の現れでもある。ただ，その「熱意」の根拠たる「正しさ」は相対的なもの。愛知県各地は，「矯正すべき地方語」が多く存在しているとの意識が低かったために記述がおこなわれなかったと考えることもできよう。

３．昭和戦前・戦中期の愛知県尾張地方における方言研究・記述

「日本方言学の母」と称される東條操が，『大日本方言地図・国語の方言区劃』をまとめたのが，昭和2年。また，同年には，柳田国男による『蝸牛考』も発表されている。この時期を，後年，東条は，方言研究の第二の山と呼ぶ (東条1958：91)。

この時代，各地の郡市町村史においても，方言の記述が積極的に見られるようになってくる。

昭和戦前・戦中期に編纂された市町村史の中で，方言記述があるのは，『大野町史』(1929)（現 常滑市)，『愛知県丹羽郡扶桑村誌稿 上巻』(1931)，『高蔵寺町誌』(1932)（現 春日井市)，『祖父江町誌』(1932)（現 稲沢市)，『町史布袋町大観』(1935)（現 江南市)，『丹羽郡大口村誌』(1935)，『西春日井郡北里村誌』(1936)，『奥町誌』(1936)（現 一宮市)，『津島町史』(1938)，『一宮市史 下巻』(1939)，『春日井史』(1943) と，11市町村に及ぶ。

一方，記述が見られないのは，以下の12町村である。『篠岡村誌』(1927)（現 小牧市)，『横須賀町誌』(1928)（現 東海市)，『萩原町誌』(1930)（現 一宮市)，『橘町』(1934)（名古屋市中区)，『成岩町

---

[8] 愛知県図書館では発行年不明として登録されており奥付も見られない。当該年度は，名古屋市図書館によるもの。

史』(1936) (現 半田市),『弥富町郷土誌料』(1937) (現 弥富市),『庄内町誌（庄内町記念録)』(1937) (現 名古屋市西区),『叢雲聯区誌』(1937) (現 名古屋市昭和区),『堀田郷土史』(1937) (現 名古屋市瑞穂区),『裏門前町誌』(1940) (名古屋市中区),『東大曽根町誌』(1941) (名古屋市東区)。その内 3 町は，当時の名古屋市内の地域史である。そのような小さな町独特の方言があったわけではないだろうから，方言が記述されなかったのも当然であると考えれば，当時の町村史の過半に方言の記述があったわけである。昭和初期，愛知県尾張地方においては，方言記述がかなり一般的になっていたと言ってよいだろう。[9]

これは，岐阜県における同時代の比率（19件中 7 件）と比べてもやや多い。大正時代からの方言記述の勢いを受け継いだものと言えるだろう。本節ではそれを確かめる。

3.1　郡市町村史における方言ならびに共通語の扱いの変遷

尾張地方の郡市町村史に見られる方言記述について，簡単に明治時代のものからまとめておく。

郡市町村史	発行年	配列順	共通語の名称	方言形の扱い	備　考
『瀬戸町誌』	1915	文章中に12項目。	－	主	
『名古屋市史』	1915	品詞別（名詞は意味順）に273項目。*1	－	主	
『愛知縣丹羽郡誌』	1917	順不同で72項目。	通常語	従	
『葉栗村志稿』	1917	意味分類順に244項目。*2	通常語	従	「語の活用」として「讀む」「書く」などを例に20形式ほど挙がる
『猪高村誌』	1918	意味別（名詞は意味順)。*3	－	主	
『尾張國愛知郡誌』	1923	品詞別（名詞は意味順）に918項目。*4	－	従	用言の活用形，文法項目あり
『東春日井郡誌』	1923	いろは順に692項目。	標準語	従	語彙中に「動詞＋助動詞」あり
『西春日井郡誌』	1923	品詞別（名詞は意味順）に536項目。*5	－	主	「接続詞。助動詞」として文末表現多数
『古知野町誌』	1925	品詞別（名詞は意味順）に172項目。*6	通常語	従	
『小牧町史』	1926	いろは順に204項目	標準語	従	「語尾附屬の方言」あり
『大野町史』	1929	五十音順に96項目	解		
『愛知県丹羽郡扶桑村誌稿』	1931	品詞別→音訛の種類別に231項目。*7	通常語	従	動詞の項に助動詞が詳述
『高蔵寺町誌』	1932	いろは順に468項目。	標準語	従	語彙中に「動詞＋助動詞」あり
『祖父江町誌』	1932	品詞別のいろは順に261項目。	普通語	従	「動詞」の項には使役，否定等の表現あり

[9] 日外アソシエーツ編集部編『全国地方史誌総目録』を基に，愛知県図書館で収集した資料より。

『町史布袋町大観』	1934	順不同に102項目。	通常語	従	
『丹羽郡大口村誌』	1935	品詞別→音訛の種類別に233項目。	通常語	従	動詞の項に助動詞が詳述
『奥町誌』	1936	品詞別，いろは順に388項目。	普通語	主	動詞の項に語尾変化の記述あり
『西春日井郡北里村誌』	1936	特に分類は示していないが『名古屋市史』の順序に似る	－	主	
『津島町史』	1938	品詞別に186項目の俚言と付属語類６形式。	－	従	助動詞，語尾について記述あり
『一宮市史』	1939	品詞別（名詞は意味順）に414項目。*8	－	主	
『春日井史』	1943	品詞別（名詞は意味順）に492項目。*9	－	主	「雑」に語尾表現

＊１：名詞，動詞，形容詞，副詞，雑。名詞は，「天時」，「地理」，「人稱」，「身體」，「器具」，「家屋」，「動物」，「植物」，「飲食」，「雑」に分類される。

＊２：「人倫」，「地理」，「身体」，「飲食」，「地理」，「建築」，「器具」，「職業」，「動物」，「植物」，「鑛物」，「其他」，「語の活用」の順。

＊３：「天文地理ニ關スルモノ」，「身体人倫ニ關スルモノ」，「物品名稱ニ關スルモノ」，「感情動作形容ニ關スルモノ」，「其他」，「訛言」，「發音」，「語法」，「語尾ニ関シテ誤ルモノ」。

＊４：名詞，代名詞，数詞，形容詞，動詞，副詞，接續詞，助辭，動詞形容詞の活用形，助動詞の活用形，時、法等の言ひあらはし方，待遇上の諸種の言ひあらはし方，語詞の組立方，方言分類例，名古屋言葉の特徴あるもの。名詞は，「天體」，「暦時」，「方位」，「氣候」，「地理」，「獣類」，「鳥類」，「魚介類」，「蟲類」，「穀類」，「蔬菜類」，「果實類」，「草木類」，「鑛石類」，「人倫に關する名稱」，「身體に關する名稱（頭部，胸腹部，四肢，排泄物，疾病）」，「衣食住に關する名稱（衣服，家屋，器具，飲食物，神佛人事に關する名稱）」，「殖產興業に關する名稱（農業，漁獵，商賣）」，「運輸交通に關する名稱」，「雑」に分類される。

＊５：名詞，代名詞，數詞，副詞，動詞，形容詞，接続詞，助動詞，敬詞，雑。名詞は，「天時」，「地理」，「人稱」，「身体」，「人事」，「器具」，「建物」，「動物」，「植物」，「礦物」，「被服」，「飲食物」，「其他」に分類される。

＊６：名詞，代名詞，動詞，副詞，形容詞，雑。名詞は，「天時」，「地理」，「人稱」，「身体」，「器具」，「家屋」，「動物」，「飲食」，「雑」，「植物」，「附數詞」に分類される。

＊７：名詞，代名詞，数詞，形容詞，動詞，副詞，助動詞，助詞，感動詞。

＊８：名詞，動詞，形容詞，副詞，雑。名詞は，「天時」，「地理」，「方位」，「人稱」，「身體」，「飲食」，「家屋」，「器具」，「動物」，「植物」，「雑」に分類される。

＊９：名詞，動詞，形容詞，副詞，雑。名詞は，「天象」，「地理」，「身體」，「住居」，「器物」，「被服」，「飲食物」，「動物」，「植物」，「自然物」，「雑」，「代名詞」に分類される。

語の配列順から，ある程度の参照関係が見えてくる。

まず，『名古屋市史』(1915) 以降，品詞別分類の中で，名詞のみ意味別に示されるものが，『葉栗村志稿』をはじめ『一宮市史』まで９編に見られる（上記「＊」で註を附したもの）。

中でも，『名古屋市史』(1915)，『西春日井郡誌』(1923)，『古知野町誌』(1925) は，よく似ており，参照関係にあったことがかなり確かである。他のものについても，『猪高村誌』(1918) が独自の分類をしているほかは，類似性を有している。また，『西春日井郡北里村誌』も，特に分類は示さず列挙してあるだけに見えるが，実際の提示順は『名古屋市史』に似る。

では，この順序は何に倣ったものなのか。東条操による『方言採集手帖』(郷土研究社，1928) も，確かに，「天文」，「地理」，「動物」，「植物」，「人倫」，「肢體 附 病名」，「住居」，「飲食」，「服飾」，「生業」，「人事」，「年中行事」と名詞を意味別に分類した後，代名詞，形容詞，動詞，雑詞の順となっている。しかしながら，『名古屋市史』(1915) の記述は，並び順のほか，「中西」など挙がることばからも，山本格安『尾張方言』(1748) に倣ったものであることは明白である（ただし，『尾張方言』には付録として載る動植物を，『一宮市史』にては「人倫」より先に配しているところなど工夫も多い)。

もうひとつ参照関係の流れが見える。『愛知県丹羽郡扶桑村誌稿』も，同じ丹羽郡の『大口村誌』で手法が踏襲されている。動詞の項に助動詞が詳述されている点でも類似しており，収録されている語も共通するものが多い。また，形式的には違いもあるが，共通語のことを「通常語」と呼び方言語形よりも先に挙げる点で，丹羽郡各町村（扶桑村，布袋町，大口村）は，『丹羽郡志』の手法を踏襲している。

このように，昭和戦前期までの尾張地方方言記述は，『名古屋市史』あるいは『丹羽郡誌』のいずれかの影響を受けて成立したものが多くなっていることがわかる。方言・訛言を無から集めることは難しい。であれば，何らかの参照関係があるほうが自然である。尾張地方の市町村史は，江戸時代からの伝統を踏まえつつ，２つの郡史を参照して記述を豊かにしていった。

３.２　加賀治雄と『土の香』

昭和に入ると，前述の起町から加賀治雄の手による『土の香』(1928-1937)[10] が発刊される。土俗趣味社刊による『土の香』は，手書きのガリ版刷りであり，限定された部数が会員に頒布されたのみであるが，この当時，岩手県で橘正一の手によって刊行された『方言と土俗』(1930-1934) とも相互に影響し合っていたようで，互いに寄稿もおこなうなど，全国的な視野で編纂されている。

加賀治雄（ペンネームで加賀紫水を名乗る）自身，最初は，「愛知縣下の特別保護建造物」や「尾北の伝説」「愛知縣の国宝」，「猿投史蹟視察旅行記」（いずれも昭和３年発行の『土の香』第１巻に加賀自身が寄稿したもの）など，多様な観点から愛知県内を見ており，特に言語だけに強い関心があったわけではない。「私は一貧家に生れ獨學にて漸く一小學校の訓導の末席を汚し十數年間育英の道に勵みましたが未知の人に非ずと感じ昨春より實業團体の一書記として貧弱ながらも日夜東奔西走劇務に従事してゐます」（加賀1931：自序）と謙遜するように，学者でもなければ，専門に方言を研究する人でもない。

転機は，昭和５年，加賀が雑誌『旅と傳説』（三元社）に投稿した「一宮地方の方言」という３ページ半の報告であった。いろは順に提示された141項目「標準語」に対応する「方言」を列挙するという簡単なものであったが，翌６年には，加賀自身の収集による『尾張乃方言』が上梓される。

興味深いのはその序文である。東條操からはじまり，『土の香』に寄稿していた能田太郎や橘正一からも序文をもらい，柳田國男からは序文に変えて「採集者と話主」という小考を賜っている。それほどに，「研究者」は，都会僻邑を問わず交流があった時代だったのであろう。

さて，『尾張乃方言』は，東條から序をもらっていることからもわかるように，また，拗音や促音に括弧が用いられることからもわかるように，『方言採集手帖』の影響があったであろうにもかかわらず，五十音順である。つまり，語意順に採集の後，整理された形で上梓されたのである。正編には1285語と付属語21形式が，また，翌７年刊の続編には，859語が載る。重複もあるため，単純に2000語超が記述されているわけではないが，この時代としてはかなりの大著となっている。

---

[10] 刊行は，昭和12年 (1937) の19巻６号でいったん終了。戦後，何冊か復刊されたとの情報を得ている（小林弘昌=私信)。なお，昭和８年の第９巻は，人間社より2013年活字に復刻出版された。

さて，市町村史との関係については，どうだろうか。『尾張乃方言』の凡例には，「起町及一宮市地方の蒐集を主し，尾張地方誌の方言を参考蒐集したものであります」と記されている。1931年までに，尾張地方では『瀬戸町誌』から『愛知県丹羽郡扶桑村誌稿』まで，知多郡を除いても10を超える郡市町村史が編まれている。参照関係もあり，単純に総和から編まれる集大成ではないが，郡市町村史がなければここまで大著にならなかったであろう。

また，同時期には，鈴木規夫『南知多方言集』（土俗趣味社1933），愛知県女子師範学校編(黒田鉱一)『愛知県方言集』(1934)なども，相次いで刊行されるなど，採録される語彙量も格段に多くなってゆく。まさに，昭和初期の尾張地方は，方言記述・研究に関し百花繚乱の花盛りを迎えたと言ってよい。ちょうど，同時期の岐阜県内の状況と比べても，この活況はめざましいものがある。国語調査会の各地方言調査の影響を受けた郡史類から始まり，それが市町村史へと裾野を広げ，さらに，中央とつながりをもつ研究者によって大著に編まれていく。そんなうねりが，戦前の愛知県尾張地方には見られる。

４．昭和戦後期の愛知県尾張地方における方言記述・研究

このように昭和初期に隆盛を極めた尾張地方の方言記述・研究の潮流は，戦後，その勢いに翳りが見られるようになる。戦後，昭和30年代までに編纂された市町村史31編のうち，方言の記述がまとまってあるのは，『西浦町史』(1955)（現 常滑市），『豊明町誌』(1959)（現 豊明市），『猪高村誌』(1959)(現 名古屋市千種区)，『春日井市史』(1963)のわずか４編に激減するのである。

紙幅も尽きそうなため，理由を簡単に３つ考えておく。

ひとつは，名古屋市の都市化，それにともなう方言の消失が考えられよう。名古屋市の人口は，昭和20年に約60万人であった[11]ものが，市域の拡大もあって昭和44年には，200万人を超えた。四半世紀の間の急激な人口流入によって，名古屋市は共通に理解し表現できる新たなことばを求めなければならなくなったことが推察される。それは，尾張地方全域でも似た状況であったであろう。

もうひとつ，地域的な関心の変化が挙げられる。特に，西春日井郡から海部郡にかけては，民俗語彙の記述が主流となり，方言のみの記述は影を潜めた。『西春村史』(1959)，『師勝町史』(1961)，『春日村史　民俗』(1961) など，1960年前後に刊行された西春日井郡町村にはじまり，1960年代後半には，海部郡の『飛島村史』(1967)，『十四山村史』(1967) で，あいつぎ民俗語彙中心の記述がなされた。

すでに述べたように，市町村史は，参照関係が比較的明確にあるなど，潮流が継承されやすい性質をもつ。そのため，その後も，『西春町史　民俗編１』(1984)，『佐織町史』(1989)，『八開村史　民俗編』(1994) など，特に尾張地方西部において民俗語彙記述は手厚くなされ続けていく。

もちろん，民俗語彙の記述であっても，方言そのものに関する記述がまったくなくなったわけではない。それでも，民具を中心に記述されているため，動詞や形容詞などの抽象的概念を表す方言語彙の記述は，なされる場がなく，その市町村の方言に関する詳細を知ることができない場合もある。やはり両方必要なのである。その一例として，西春日井郡師勝町(現 北名古屋市)では，『師勝の方言』(1988) という66pp.からなる小冊子を作成している。

ただ，大学も多く存在し知の拠点でもある名古屋市を擁する愛知県尾張地方である。山田達也氏，丹羽一彌氏ほかによる大がかりな記述を含む『新修稲沢市史　研究編』(1982)[12] は，その知の集積があってこそ産出された大著である。また，同氏らは，さらに，愛知県教育委員会編『愛知のことば』

---

[11] 戦争が激しくなる前の1941年には1,379,738人（名古屋市のホームページより）であったため，疎開からの帰還者を考慮に入れれば，実質倍増ぐらいであろうか。

[12] 当時，山田氏は名古屋市立大学教授，丹羽氏は東海学園女子短期大学助教授とある。

(1985)，瀬戸市編『瀬戸のことば』(1990) などに関わっている。一度，集積された知は，長期にわたってその地を知の拠点としていく。これは，岐阜県加茂郡白川町地域で，明治以来，幾度も方言に関して言うだけでも多くの記述がなされた結果，今でも，同地域は，郷土教育に熱心な地として名を馳せていることからも伺える。愛知県尾張地方は，戦後の社会構造の変化もあってか，戦前からの方言研究のよさをうまく継承できていない地域もある。旧来の方式に限らず，より多方面から継続的に記述・研究，さらには応用していく必要があると考えられる。

5．おわりに

今回，扱えなかった資料に，明治時代の『風俗畫報』に載った千種堂梧尺 (1899)「名古屋の方言」など，雑誌所収の考察がある（東條1938:「総記」97-99)。また，2.3節で述べたように，刊行されなかった記述・考察もあり，今に伝わってきていない研究もあるだろう。地方における方言研究の近代史を詳らかにするためにさらなる資料の発掘・研究が望まれる。

本稿では，郡市町村史の方言記述を中心に見てきた。地域史を編むことは，その地に知の種を蒔き人を育てることである。どのような種を蒔くかの取捨選択はあるかもしれないが，その中で，方言記述も，地域史に欠かすことのできない大きな柱であることは言を俟たない。方法論は時代に合ったものを探りつつも，継続してその地域の言語を地域の視点から観察し続けていくことが肝要である。

【謝辞】

本稿を為すにあたって，愛知県各地の図書館員の方々から種々の便宜を賜った。感謝申し上げる。

【付記】

本研究は，日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「愛知県・福井県の方言データベース構築および岐阜県方言との関連における総合的研究」（課題番号26370532，代表：山田敏弘）の研究成果の一部である。

【参考文献】（本文中に引用した方言資料は除く）

芥子川律治 (1971)『名古屋方言の研究』名古屋泰文堂

国語学会編 (1961)「方言研究小史　－明治初年から終戦まで－」『方言学概説』武蔵野書院

国語調査委員会編 (1906)『口語法調査報告書』(1986　国書刊行会より復刻)

近藤恒次補訂編 (1960)『新訂 三河国宝飯郡誌』国書刊行会

佐野比呂子 (2014)「教材『かみなりさま談義』考 (2)」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』64-2

東條操 (1938)『方言と方言学』春陽堂

東条操 (1958)「方言研究のあゆみ －国語調査委員会と東京方言学会と雑誌『方言』」『国語学』35

竹田晃子 (2008)「明治期国語調査委員会による音韻口語法取調の概要と第2次調査資料の分析」『日本方言研究会 第87回研究発表会 発表原稿集』

彦坂佳宣 (1997)『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院

山田敏弘 (2010)「岐阜県における方言研究・記述の歴史」『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』58-2